令和2年度第2回特別展

加藤倉吉

最も多くの「顔」を彫り上げた男

独立行政法人国立印刷局
お札と切手の博物館

印刷局伝統の技・凹版彫刻

凹版印刷とは

凹版印刷は、お札などの特殊な印刷物や版画作品などにのみ使われる特別な印刷方式である。名前の通り、彫刻等によって作られる凹んだ画線にインキを詰め、強い圧力で印刷すると、溝の深さの分だけインキが盛り上がって紙に転写されるため、ざらざらとした独特の手触りとなる(図１)。

凹版印刷は、15世紀ごろに初めてヨーロッパに登場した。その技法は、甲冑(かっちゅう)などの武具や貴金属に装飾模様を彫り込む技術に由来し、これを手掛けた金工師が発展させたものである。

日本にその技術が伝わったのは16世紀後半のことで、キリスト教の伝道のため、宗教画の印刷技術として教授されたことによる。しかし、その直後に徳川幕府がキリスト教を禁止したため、技術は普及せずに途絶えてしまう。再び凹版印刷(腐食凹版、エッチング)の技術が導入されたのは18世紀末になってからのことで、蘭学の発展に伴う洋書の普及によるものであった。

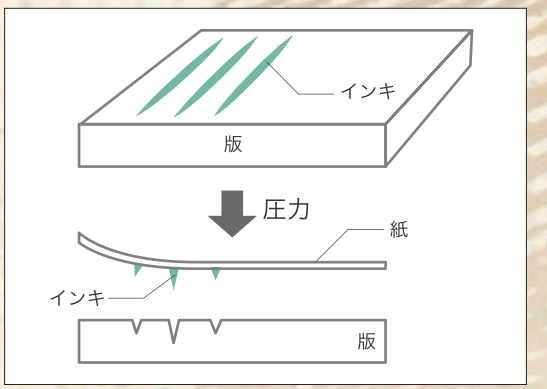


図１　凹版印刷の仕組み

印刷局伝統の技

印刷局は、明治４(1871)年の創立以来、150年にわたって日本のお札や切手、諸証券類といった国の重要な印刷物の製造を担っている。これらになくてはならないのが、偽造を防ぐ技術であり、すなわち印刷局の代名詞たる凹版彫刻である。

お札には、偽造防止のために肖像が描かれている。これは、毎日見慣れた顔が少しでも違うと、私たちはすぐにその違いに気が付くことから、真偽判別を容易にするという狙いがある。

そして、この肖像をつくる要が、原版彫刻技術にある。一見写真のように見える顔は、実は手彫りによる緻密な画線で構成された精巧な凹版画である(図２)。工芸官と呼ばれる印刷局の熟練の専門職員が、ビュランという特殊な彫刻刀(図３)を使って金属板(原版)に画線を慎重に少しずつ彫り進めてゆく(図４)。このように、金属板に直接手作業で彫刻する技法を直刻凹版(エングレーヴィング)という。彫刻画線によって図柄を細部まで表現する芸術性の高い技術で、画線の細かさは、１ミリの幅に10本以上の線を彫れるほどであり、高度な技術ゆえ、簡単には真似ができない。

肖像彫刻にあたっては、画線の深浅、大小、太さ、強弱等を巧みに使い分けながら、その人物の内面にまで迫るような表現力が求められる。ただ細かければよいわけではなく、限られた画線で陰影や質感などを表現するのが彫刻者の腕の見せ所である。たった１本でも画線の入れ方を間違うと人相が変わってしまうため、失敗は許されない。肖像の彫刻には、たゆまぬ研鑽(けんさん)と努力、根気が必要である。

直刻凹版による肖像は、お札の偽造を防ぐ重要な要素であり、かつ、独特の風格と重厚感から、お札の信頼感をも深めるものとして、その技術とともにお札に受け継がれてきた。

印刷局が製造するお札や切手は大量生産品で、しかも均質な印刷物でなければならない。ゆえに、その彫刻技術の性質は芸術作品とは異なり、印刷用の版面製造(製版)技術や、印刷機の性能、進歩と密接に関わってきた。また、偽造防止の観点から民間の技術とは交わることがなく、独自の発展を遂げており、歴史ある伝統技術となっている。

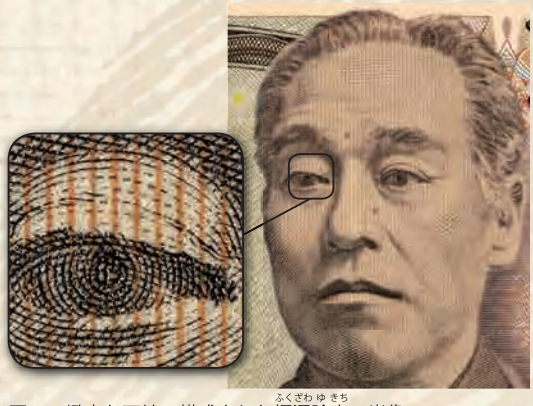


図２　緻密な画線で構成された福澤諭吉(ふくざわゆきち)の肖像
日本銀行券　Ｅ１万円(部分拡大)　平成16(2004)年

図３　ビュラン
刃先がＶ字型になっている

図４
彫刻作業風景

受け継がれる技

歴代工芸官の系譜　キヨッソーネから加藤倉吉まで

イタリア人銅版画家キヨッソーネ(図５)は、明治８(1875)年にお雇い外国人として来日し、印刷局で技術指導を行った。これが、印刷局における凹版彫刻の歴史の始まりである。キヨッソーネは17年間の在任中、明治時代草創期のほぼすべてのお札、切手、諸証券類のデザイン、原版彫刻を自ら手掛けたほか、彫刻だけでなく、印刷や製紙などの幅広い技術を教授し、日本の紙幣製造の礎を築いたことから、「日本近代紙幣の父」とも呼ばれている。

キヨッソーネとともに、印刷局の彫刻技術の礎を築いたのは、大山助一(図６)である。アメリカで習得した技法を印刷局に持ち帰り、「ビュランの名手」として明治後期から大正時代に国内外で活躍した。昭和期にこれを受け継いだ加藤倉吉は、キヨッソーネ同様、戦中・戦後に印刷局が受注した国内外のお札、切手、諸証券類の原版彫刻のほとんどを手掛けた腕利きの工芸官であった。

彫刻技法

直刻凹版の彫刻技法は、画線の深浅、太さ、強弱等の特徴によって、緻密で繊細なヨーロッパ式と、力強く重量感のあるアメリカ式とに区別される。

キヨッソーネが手掛けた肖像はヨーロッパ式の技法で、等間隔の平行線の疎密と、点の大小で明暗を表現している。画線の彫刻には、ビュランだけでなく針(ニードル)や機械も使っており、エッチング*やメゾチント**など複数の技法を併用している。繊細で彫りが浅い画線によって、人物の表情、毛髪や衣服の質感などを柔らかく表現している(図７)。

一方、大山は、キヨッソーネからヨーロッパ式の技法を学びながらも、現地で習得したアメリカ式の技法を確立した。キヨッソーネが繊細な画線で柔らかく表現するのに対し、大山は、画線の太さで明暗を表現し、ビュランのみを使った簡潔で彫りの深い力強い画線によって、人物をダイナミックに生き生きと表現している(図９)。

なお、キヨッソーネのヨーロッパ式に始まり、大山のアメリカ式へと移行した印刷局の彫刻技術は、現在では、両者の長所を生かした中間的な技法が採用されている。

*エッチング…防食剤を塗った金属板を針で彫り、その部分のみ腐食させて、凹みをつくる技法。
**メゾチント…金属板全体に細かい傷をつけ、部分的に削ることで、微妙な明暗をつけ、柔らかい階調表現ができる技法。

肖像の芸術性と偽造防止効果

肖像は、技法だけでなく、彫刻者の個性、表現方法などによって仕上がりが異なる。明治、大正から昭和初期のお札は、同じ人物を繰り返し採用したため、様々な彫刻者による表現の違いが見られる。その一例が和気清麻呂の肖像にあり、彫刻者がキヨッソーネ、その弟子・細貝為次郎、大山助一、加藤倉吉と代々替わっているため、表情や全体の印象は四者四様となっている(図７～10)。

彫刻者が、各々の美意識や解釈によって画線を構成し彫り上げた肖像は、独自の芸術作品といえる。それぞれが生み出した芸術性の高さによって、偽造防止効果はさらに高められている。

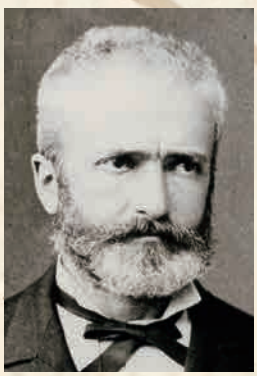


図5　エドアルド・キヨッソーネ
(1833-1898)

図６　大山助一
(1858-1922)

和気清麻呂の肖像
(明治、大正、昭和時代のお札の肖像部分拡大)

図７　キヨッソーネ彫刻　明治23(1890)年
繊細で彫りが浅い画線で表情、毛髪などを柔らかく表現

図８　細貝為次郎彫刻　明治32(1899)年
キヨッソーネの技法を受け継いだ表現

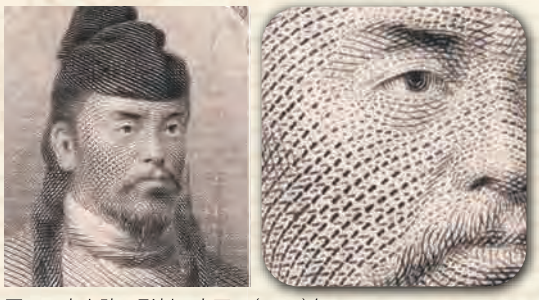


図９　大山助一彫刻　大正４(1915)年
簡潔で彫りの深い力強い画線で表現

図10　加藤倉吉彫刻　昭和５(1930)年
大山の技法を受け継いだ力強い表現

加藤倉吉とは

印刷局を目指した倉吉

加藤倉吉は、明治27(1894)年、東京・馬喰町に誕生した。父は著名な画家・版画家の安田雷洲や中村月嶺にも師事した「月尾庄太郎」という人物で、地図やラベルの原版彫刻に従事しており、現在もその作品が残っている。父は印刷局の彫刻者への誘いを断る一方で、息子の倉吉には「彫刻技術の中では印刷局の大山さんの肖像彫刻が最高のものだ」といって、倉吉の物心がつくころから折にふれて印刷局に入るよう勧めた。倉吉本人も「印刷局の彫刻者」を視野に、10歳ごろから、月刊誌「日清戦争実記」に掲載されていた日本やロシアの将軍の顔写真を参考に、ノートに顔を拡大して描き、その中に細かな線や点を書き入れるなどしていたという。驚くべきことに、倉吉はこのころから、すでに肖像彫刻者としての感性を意識的に磨いていたのである。

こうした倉吉の才能は、印刷局で工芸官として活躍していた父の友人・田沢昌言の知るところとなり、倉吉は明治43年、16歳にして中学を中退し、印刷局の彫刻課に採用されたのであった。

新たな表現の模索

入局後は、大山助一彫刻課長の下、見習いとして先輩の森本茂雄に付いて修行を始めた。森本茂雄も彫刻の名手と呼ばれた一人で、切手のほか、初めて聖徳太子の肖像(図12)を彫刻した人物である。このお札で、倉吉は「百」の連続文字や輪郭を担当している(図12左)。

一方、切手も輪郭から担当し(図13)、主模様を担当するまでになった。特に凸版印刷による「風景切手」の名古屋城(図14)は、倉吉の提案で実験的な手法をとったものである。従来は原画の大まかな線をゼラチンシートに写し取って、これを銅版に定着させ、その線を目安に彫刻していた(p.5「凹版版面ができるまで」)のに対し、線に勢いを出したいという考えから、墨絵の原画を撮影し、その写真を金属板に直接焼き付けて彫刻するという新たな技法を考案したのである。以後、凸版切手の製造は、従来の複雑な方法から、この「写真製版」の技法を採用することとなった。

また、オフセット印刷による切手で初めて肖像が採用された「万国郵便連合加盟50年」記念切手では、「日本郵便の父」前島密を彫刻している(図15)。肖像は、少しの線の歪みやズレでも人相が変わってしまうため注意を要するが、オフセット印刷では線のつぶれが起きてしまう。そこで、通常の凹版のような複雑な画線構成ではなく、横線のみで表現するという新たな手法を見出した。これは、後の凸版切手による肖像にも用いられた。

さらに、「第15回赤十字国際会議記念」切手(凹版・凸版印刷)では、日本赤十字本社の建物を彫刻した。画面の立体感や画線の力強さを求めた倉吉は、建物は直刻、地面と空はエッチングと、部分ごとに技法を変えて工夫を凝らしている(図16)。ちなみに、印面の右下白枠に入っている赤十字マークは凸版によるものだが、マークがなかなか中心に合わずに苦労したという。

肖像の部分はお札の価値を左右するものであるだけに、その彫刻は彫刻家の最高栄誉と考えられていた。

図11　38歳の倉吉
画像提供：郵政博物館

図12
倉吉が枠模様(左)の彫刻を担当したお札
日本銀行兌換券　乙100円　昭和5(1930)年

図13　倉吉が輪郭を担当した切手
東宮御婚儀祝典記念　8銭　不発行

図15
横線のみで表現した前島密
万国郵便連合加盟50年記念
3銭　昭和2(1927)年

図14　新技法の凸版切手
風景切手　10銭　大正15(1926)年

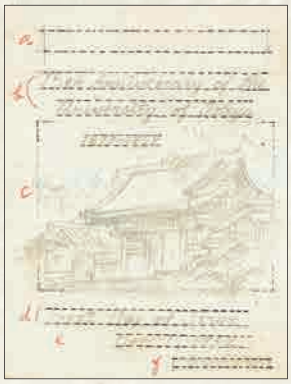
図16　様々な彫刻技法を使った切手
第15回赤十字国際会議記念
3銭　昭和9(1934)年

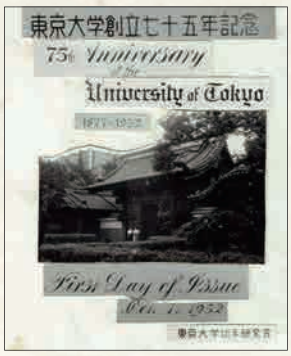
工芸官・加藤倉吉とその業績

凹版版面ができるまで 【東京大学創立75年記念初日カバー（昭和27（1952）年、加藤倉吉彫刻）の場合】

①原図の作成

図案や文字位置の構成を決めてデザインを描く。下は、スケッチや文字をより具体化した写真原図。





②ゼラチン型取り

原図の上にゼラチンシートをのせ、彫刻針で大まかな輪郭を写し取り、ベンガラ粉（赤い顔料）をつける。

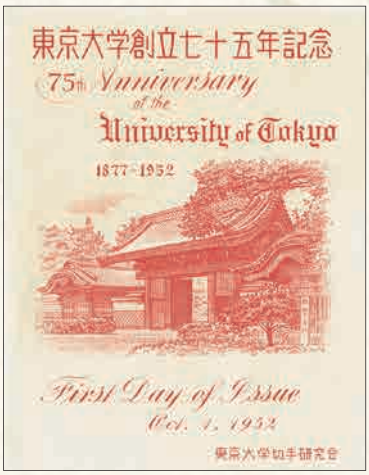
③版面への転写

ベルニー（防食剤）を塗った金属板に②のゼラチンシートをのせてこすり、ベンガラの跡をつける。

④彫刻（版面）

ベンガラの跡をたどって彫り進める。

⑤印刷（完成品）



彫刻（凹版）からその他の版式へ

彫刻凸版とは

凹版は画線部分を彫刻するが、彫刻凸版は画線以外の部分を彫刻する。シャープで力強い表現ができる。

凹版→平版

画線を彫刻した凹版版面にインキを詰めて転写紙に印刷した後、この転写紙に移った画線を石版や亜鉛板に転写する。これが平版原版となる。

初の肖像彫刻

倉吉が初めてお札の肖像を彫刻したのは、昭和５（1930）年発行の10円札で、その人物は和気清麻呂であった（図17）。

このお札は、当初は森本が担当する予定であったが、持病の悪化により、倉吉が任命されたのである。この時、倉吉は森本から辞退を迫られたが、「一生に一度あるかないかのチャンスだ。大山さんのようになりたくて今日まで勉強してきたのだからできるつもりである。任命されたのだから断るわけにはいかない」と主張したという。

倉吉は、業務では肖像を彫刻したことがなかったが、自宅ではすでに数人の肖像を彫刻しており、密かに自信を持っていたのである。結果、キヨッソーネの過去の作品を参考に、大山から受け継いだ力強い画線で倉吉が彫り上げた新たな和気清麻呂がお札に採用されることとなった。以後、倉吉は肖像彫刻者の新たなエースとして重要な任務を任されてゆくこととなる。

ちなみに、倉吉の最初の肖像彫刻を採用し、当時の技術を結集したこの10円札は、後に、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の職員によって「世界でも屈指の逸品」と評された。

図17
（上）倉吉が最初に彫刻したお札の肖像（和気清麻呂）
日本銀行兌換券　丙10円　昭和５（1930）年
（左）彫刻前に倉吉が描いたコンテ画
コンテ（クレヨンの一種）を使って描くデッサン。彫刻の際の配線などを考えながら、陰影や濃淡を細かく描いたもので、大きさは、原寸の４～６倍である。

図18
（右）倉吉が続いて彫刻したお札の肖像（藤原鎌足）
日本銀行兌換券　乙20円　昭和６（1931）年

激務に追われる倉吉

戦争と印刷局事業

日本は、昭和6(1931)年、中国東北部などに対して起こした軍事行動(満州事変)を皮切りに、中国との全面戦争(日中戦争、昭和12年)、第二次世界大戦(昭和14年)、太平洋戦争(昭和16年)へと次々と参戦していった。

戦地や占領地での物資の調達等には、日本が独自に発行する特殊紙幣(軍用手票【軍票】)を用いた。また、現地の政府や中央銀行との協定等によって調達した現地の通貨(外地券)を充てた。日本は、戦地を広げると同時に、各地の通貨に合わせた多種多様なデザインの軍票、外地券、切手、諸証券等を次々と発行した。

一方、日本国内のお札や切手、諸証券等についても従来通り製造を続け、必要に応じて新たな製品を生み出さねばならなかった。特に、満州事変以降増大した軍事費は公債で賄われる方針となったため、公債が増発されることとなった。また、軍事費の増大に伴って日本の財政規模は膨れ上がり、お札の発行高も飛躍的に上がっていった。

これら国内外の膨大な数の製品製造を一手に担う印刷局の業務は、多忙を極めただけでなく、戦況に伴う緊急製造の注文がいつ何時入るかしれない緊迫した事態となっていた。印刷局では、設備を増強し、人員を増員するとともに、新工場を建設して緊急事態に対応し続けた。

この時、確かな技術と驚異的なスピードで国内外のお札、切手、諸証券類の緊急製造に多大な貢献をしたのが、加藤倉吉だったのである。

図19　倉吉が富士の構図を決め彫刻したお札
小額政府紙幣　50銭　昭和13(1938)年

図20　倉吉が33日間で彫り上げた
日本武尊(やまとたけるのみこと)の肖像(右)と作業日誌(下)
日本銀行兌換券　甲1000円
昭和20(1945)年

日本のお札と切手

戦時中、倉吉がまず手掛けたお札は、50銭紙幣であった(図19)。これは、金属不足により当時のコインの最高額面を紙幣化したもので、小額ながら平時と変わらない凹版印刷や、すかし入りの良質な用紙などが用いられた。倉吉は富士山の風景を取材するため現地へ赴き、苦心の末、静岡県の愛鷹山(あしたかやま)(越前岳)から眺めた富士山の構図に決めたという。

その後のお札は、時局に伴い量産化を図るため、お札の様式を簡素化することとなった。それというのも、前述の通り、軍票や外地券などを一手に製造していた印刷局で、同時期に高水準の日本のお札を量産することが難しかったからである。

お札の主模様については、表面は変わらず凹版印刷であったが、裏面は凸版方式へと変わり、低額のお札では表面も凸版へと簡易化された。倉吉は、同時期に複数のお札の凹版、凸版用の肖像、風景の原版彫刻を手掛け、それぞれわずかな期間で仕上げている(図20)。

また、国債などとともに、切手についても凹版、凸版、オフセット印刷用の原版を彫り上げ、原画や元写真に忠実に、それぞれのデザインに最も適した表現を用いて作風を変えている(図21～23)。

図21
横線で表現した肖像(凸版)
第1次昭和切手　2銭
昭和12(1937)年
従来にない西洋木版の方式をとり、白線で浮かび上がるように乃木希典(のぎまれすけ)を表現している。画線はp.4・図15と同様に簡潔な横線となっている。

図22
輪郭線で表現した肖像(凹版)
第1次昭和切手　5円
昭和14(1939)年
複雑な画線を使わず、ほぼ輪郭線のみで藤原鎌足を表現している。

図23
直刻ならではの画線で表現した肖像(凹版)
第2次昭和切手　15銭
昭和17(1942)年
ビュランならではの力強い画線で少年航空兵を表現している。

倉吉の作業日誌には、ラフな下図とともに、作業日程などが併記されているが(p.6・図20下)、通常は数か月間かかる肖像彫刻をわずか数日間で仕上げるなど、驚異的な速さが分かる。この超繁忙期については、倉吉本人が「日誌の日々を見返すだけで震え上がってしまう」と振り返るほどで、当時の業務がいかに苛烈だったか、想像に難くない。

倉吉は、昭和18年、彫刻課長に任命され、名実ともに印刷局の彫刻部門のトップに立った。

満州のお札と切手

日本は、満州事変の結果として中国東北部と内モンゴルを占領し、昭和７年、「満州国」を設立させた。そのお札や切手、諸証券等の製造を担ったのが印刷局であり、原版彫刻を手掛けたのが倉吉であった。

特に、最初のお札は至急製造の命を受けたため、原図、彫刻ともに時間をかけられなかった。そのため、肖像ではなく国旗と建物を主模様とし(図24)、同一のデザインを複数の券種や公債にも転用することとなったが、倉吉はその彫刻をわずか４日間で仕上げた。こうした功績が認められ、昭和９年、倉吉は「満州国」皇帝から「建国功労章」を授与された。同様に、軍務への功績に対し「昭和六年乃至九年事変従軍記章」と、勲八等瑞宝章が授与されており、その貢献度が評価されている。

倉吉は、その後のお札についても、５券種中４券種の肖像を手掛け、切手や印紙等も担当した(図25、26)。

当初は日本で行われていたこれら証券類の印刷は、現地に工場設備を設けることで漸次移行し、技術指導に切り替わっていった。

各地の軍票ほか

日本が各地に進駐するにつれ、軍票や諸証券等の製造・発行が増えていった。中国のほか、マレー(現マレーシア)やフィリピン、ビルマ(現ミャンマー)、タイ、オーストラリア等の南方で使用するための諸証券類の数々が発行されている。

軍票は、当初日本のお札のデザイン等を流用したものであったが、戦争が長引くにつれ、新たなデザインのものが製造されるようになった。倉吉は、その主模様等を担当し、多種多様な諸証券類の彫刻を手掛けた(図27～29)。

こうした軍票等の製造にあたっては、その通貨価値を維持するため、品質や製造量を落とすことができなかった。それというのも、現地で従前使用されていた欧米製の精巧なお札等に比して日本の印刷技術が劣らないことを示し、また敵国による経済かく乱のための偽札製造等を防ぐ必要があったからである。

図24　倉吉がわずか４日間で彫り上げた「勤民楼(きんみんろう)(皇宮)」(右)を採用した「満州国」最初のお札
満州中央銀行券　100円　昭和８(1933)年

図25　孔子を彫刻したお札
満州中央銀行券　１円　昭和12(1937)年

図26　皇帝・溥儀(ふぎ)の肖像(左)と勤民楼(右)を彫刻した切手
「満州国」切手　20分　昭和７(1932)年
「満州帝国」切手　「登極記念」1.5分　昭和９(1934)年

図27　田植え風景を彫刻した切手
フィリピン　２センタボ　昭和18(1943)年

図28　水辺の風景を彫刻した軍票
軍用手票　に100ドル　昭和19(1944)年

図29　少年時代のプミポン前国王を彫刻したお札
タイ　1000バーツ　昭和19(1944)年

とにかく目が回るほど忙しく、発注されればどんなものでもやらざるを得なかった。しかも、他国に見られても批判を受けないようなものを彫るのが当時の使命であった。

図30
48歳の倉吉

激務に追われる倉吉

精巧な軍票等の大量製造体制を維持し続けるため、印刷局は総力戦体制をしき、大規模な設備投資も行ったが、それでも間に合わなくなると民間会社の協力を仰がざるを得なくなった。また、印刷局内部で「臨戦体制二割五分増産運動」を推進し、職員の更なる奮起と生産力の拡充を促した。政府も、こうした重要な印刷物の製造能力を優先的に確保するため、高級印刷物製造等統制規則を公布した。

軍票は、日本で印刷し輸送していたが、戦闘が激しくなると、輸送船が沈められ現地に届かなくなることが増えた。そこで、現地での製造のため、倉吉も昭和19(1944)年にフィリピンに派遣、陸軍の臨時嘱託に任命されたことがあった。現地マニラでは、印刷会社が保有する機械や資材の在庫調査を行い、苦労して英語を訳し、軍部に提出する業務を行ったという。帰国便がなかなか見つからず、ようやく乗った飛行機は、上空を飛ぶと敵に発見されやすいので、海面すれすれを飛び、また雲に隠れながら飛んで、ようやく帰国することができた。

図31　(上)(中)記録映像に映る47歳の倉吉
(下)記念式典で表彰される倉吉

この仕事は、自分個人の仕事でなくして、国のもので、これは外国に比較されるのです。ですから責任が重いのです。ただ単に、自分の報酬のための仕事でなくして、国の責任のある仕事なんだから、怖いですよ。

とにかく我々は、技術者は技術者としての立場から、少なくとも、よその国に負けないようなものを作りたいと思うのですね。

印刷局創立七十年記念式

戦時中のさなかの昭和16年11月10日には、印刷局の創立70年を祝う記念式典が挙行された。当時の東条(とうじょう)首相も出席し、その祝辞では、印刷局が「国運の進展に応じて任務を全うし続けてきた」と評価している(図32)。式典で表彰された職員は907名に上り、その筆頭として倉吉が賞状等を授与されている様子が式典の記録映像に残っている。

式典の別室では歴代の印刷局製品を陳列し、来賓の展覧に供した。「お札の人物原画(コンテ画)」コーナーでは、10点の展示品のうち半数が倉吉の作品であったほか、歴代工芸官の名を冠したコーナーでは、「技師加藤倉吉作品」として「子爵斎藤実(さいとうまこと)像」、「岡田啓介(おかだけいすけ)像」(ともに戦時期の元首相、図33、34)などが並んだ。また、歴代の日本のお札、切手、外地券、軍票のコーナーも設けられ、倉吉による数々の製品が式典を飾った。

さらに、来賓に贈呈された記念品「内閣印刷局創立七十年記念試作品集」には、17点の試作品が収められたが、このうち倉吉は風景、肖像、建物などバラエティに富んだ7点を手掛けている。なかには、倉吉の作品としては珍しく、明るい色を用いて印刷したあどけない少女の凹版画もある(図35)。

図 32
記念式典での東条(とうじょう)首相の祝辞

図 33　「子爵斎藤(さいとうまこと)実 像」
昭和9(1934)年

図 34　「岡田(おかだ)啓介(けいすけ)像」
昭和10(1935)年

図 35　「内閣印刷局創立七十年記念試作品集」の一部

「黄浦江(こうほこう)」

「富士山」

「乃木(のぎ)将軍」

「グリルパルツァー」
(オーストリアの劇作家)

「少女」

戦後・退職へ

戦後の業務～退職

昭和20年には、印刷・製紙を担う複数の主力工場が空襲で全焼するなど、印刷局は壊滅的な打撃を受けてしまった。戦後は、民間会社の協力を得ながら設備の復旧に努める一方、物資不足でインフレが進んだことから、引き続きお札の増産体制がとられ、多忙な業務は続いた。その後発行された新券（Ａシリーズ）のデザインは、公募で決まった図案等を採用し、民間会社と印刷局とが総力を挙げて製造することとなった。

このＡシリーズは、物資不足の中、質より量を優先して短期間で急造したお札であったため、用紙・印刷とも粗雑であった。また、印刷局と、民間５会社12工場とで印刷したことから、インキの色等の統一に欠き、結果、不良品や偽造事件が多発してしまった。デザインも券種によってばらばらで、最高額面以外に肖像を採用しなかったことから、偽造防止効果を弱めたとも言われた。

そこで、偽造防止技術を強化し、良質で均質、統一感のあるお札（Ｂシリーズ）を新たに製造することとなった。

この間、倉吉は戦中と変わらず、普通・記念切手のほか、証券類の下図や原版彫刻を手掛けていた。また、戦後早々には、将来のお札のための肖像彫刻に着手している。昭和21年９月から昭和23年11月までの間、切手その他の原版彫刻を手掛けながら、新たなお札用の肖像を彫り上げ、このうち３人が実際に採用されている（図36 ～ 38）。

こうした自らの業務はもちろん、倉吉は彫刻課長として、何より技術者としての経験と矜持（きょうじ）をもって、厳しくも温かい目で後輩を育て上げた。後の高度経済成長期に発行されたＣシリーズ、Ｄシリーズのお札や、切手ブームに沸いた当時の多種多様な切手等の原版彫刻を手掛けたのは、倉吉の直弟子たちである。そして、その技術伝承は現在まで脈々と続いている。

このように多方面に貢献し続けた倉吉であったが、戦後新たに導入された職場の階級制度に対し、技術者（後輩）の処遇を守ろうと画策した結果、自らは身を引くこととなった。

図 36　板垣退助を彫刻したお札
政府紙幣　B50銭　昭和23（1948）年

図 37　聖徳太子を彫刻したお札
日本銀行券　B1000円　昭和25（1950）年

図 38　岩倉具視を彫刻したお札
日本銀行券　B 500円　昭和26（1951）年

図 40　二宮尊徳（金次郎）を彫刻した切手と印紙
左：郵便切手貯金台紙　10銭　昭和16（1941）年
右：取引高税印紙　１万円　昭和23（1948）年

図 39　「大久保利通公肖像」
昭和22（1947）年制作

退職前最後の仕事

文化人切手・野口英世（のぐちひでよ）の彫刻

倉吉が最後に担当した製品の一つで、特に本人の思い入れがあったのは「文化人シリーズ」の切手である。

戦前から記念切手の審議会の委員を務めていた倉吉は、肖像彫刻者としての立場から、肖像を全面に配した同シリーズの発案者の一人となり、また同シリーズに選ばれた18人の文化人のうち、筆頭の野口英世の彫刻を手掛けた。

倉吉はまず、お札の肖像のようなオーソドックスな表現で、精魂を込め、10日間で野口の肖像を彫刻した。ところが、倉吉本人が仕上がりに納得できない。そこで、締め切りが迫る中、倉吉は職場に寝泊まりし、寝食を惜しんで再彫刻を始めた。今度は、切手ならではの自由な表現で、やや荒彫り、顔の点には思い切った強弱をつけ、写実よりも絵画的に彫ったもので、わずか５日間で仕上げた。この１作目と２作目をもって、印刷局内や発行元の逓信省で検討したところ、賛否は半々であったが、結果的には２作目の方が面白いとの評価を得た。切手ならではの表現に軍配が上がったのである。

切手用原版はこれで決まったかに思われたが、切手の発行まで間があったこともあり、その間に郵便料金が値上がりしてしまった。元々「５円」で彫刻していた額面を急遽「８円」に彫り直すこととなったが、一から彫り直す時間がなかったため、転写機で原版を一旦円鋼ロールに写し取り（転写法**）、数字部分を削ったものを別の銅板に写し取って、その上から金額を入れ直すというように転写を繰り返したため、原版の精度が落ちてしまった。倉吉が苦心して編み出した彫刻画線の妙味は発揮されず、本人も後に「重ね重ね残念だ」と振り返っている。

「文化人シリーズ」切手は、昭和24（1949）年から27年まで４年をかけて完了したが、残り17人の文化人については、倉吉が退職したため後輩たちが彫刻している。これらについても、倉吉にとって縁の深いシリーズであることから、折にふれて職場を訪ねては指導を続けたということである。

図 41
野口英世を彫刻した切手
文化人切手　８円
昭和24（1949）年

図 42　55 歳前後の倉吉

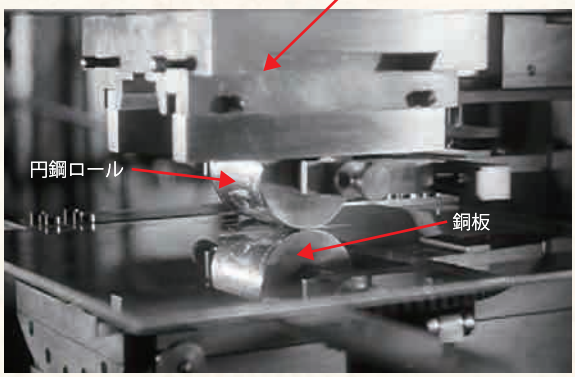
人物彫刻というのは一番難しい。風景だと、松の枝の一本や二本、あってもなくても差し支えないが、人物はそれができない。目鼻口、すべてわずかの狂いで似なくなるのは当然でしょう。

技術者の仕事は記録にしたり言葉にはできませんね。文章などはおことわり。理屈も計算もない。ただ熟練あるのみです。仕事で見てください。

「昭和天皇御真影」

在職中最後の作品となったのは「昭和天皇御真影」である。キヨッソーネの作品「明治天皇御軍装」に影響を受けた倉吉は、宮内庁に直談判して許可を得、写真を借り受けるとともに、行幸先へも出向いた。そこでは「報道班」の腕章をつけて待機し、説明を聞く天皇ご本人の姿を前から撮影し、できるだけ近くでそのご様子を見つめ続けたという。これら取材内容をもとに１年ほど彫り進めた作品であったが、退職時までには完成を見なかった。そこで退職後も職場に通い、後進の指導を行いながら作業を続けて、さらに１年をかけ、昭和25年に仕上げたものであった。完成後には、彫刻した原版と、その印刷物７枚を宮内庁に納めたが、倉吉本人が許可を得て保管していた１枚が、お札と切手の博物館に残されている。

**転写法



まず、彫刻した鋼版（軟鋼、凹原版）を焼き入れして硬くし、これを転写機にのせる。この上に円柱形の軟鋼（円鋼ロール）をのせて強圧を加えながら転がすと、原版と反対の凸模様ができる。次に、別途用意した銅板に、この凸模様のロールを転がせば、原版と同じ凹版面ができあがる。

転写法は簡単で短期間に仕上がるが、反面、原版を忠実に再現できないという欠点がある。

作家・加藤倉吉とその作品

倉吉は、印刷局を退職してから一彫刻家としての道を歩み始める。自らの作品の制作はもちろん、法人からの株券や手形、個人からの肖像版画の制作等の依頼に応じたほか、これまでの切手彫刻の腕を買われて、切手収集家向けの製品を受注するなど、活動は多岐に渡った。

国の「顔」たる数々のお札や切手等の製造に貢献し、バラエティに富んだ作品を残した倉吉は、平成４(1992)年に98年の生涯を閉じた。

図 43
晩年の倉吉

肖像画

著名な外国人の肖像を多く手掛けている。

図 44 「ケネディ」 昭和41(1966)年制作
第35代アメリカ大統領ジョン・F・ケネディ(1917-1963)の没後に彫刻したもの。

図 45 「エチオピア皇帝」 制作年不明
関係者からの依頼を受けて制作したエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ(在位1930-74)の肖像画。

図 46 「マダム・ユーハイム」 制作年不明
大正時代、日本にバウムクーヘンを広めたドイツ人菓子職人カール・ユーハイムの妻エリーゼ(1892-1971)の肖像画。戦後強制送還された後、昭和28(1953)年に再来日した。

風景画

自身が撮影した写真を元に素描、彫刻、印刷を行っており、ユニークな作品が多い。

図 47 「祇園祭」 昭和46(1971)年

図 48 「日比谷音楽堂」
昭和46(1971)年

図 49 「貫井弁天（貫井神社）」
昭和47(1972)年
貫井神社は東京都小金井市にあり、倉吉の住まいの近所であった。

図 50 「芦ノ湖」
昭和49(1974)年

初日カバー

初日カバーとは、切手収集家用のアイテムで、切手の発行を記念し、封筒に切手を貼って発行初日の消印を押した封筒である。専用の封筒が各団体で企画・発行され、昭和30年代には切手収集家の半数が初日カバーを集めるほどの人気だったという。

「印刷局製初日カバー」は、昭和33(1958)年から昭和40年まで約160種が発行された豪華版封筒である。デザインは郵政省の技芸官(切手デザイナー)、彫刻は倉吉、凹版印刷(印刷局)と、切手製造に携わる第一人者が手掛けたもので、「世界最高の技術をほこる大蔵省印刷局製」と紹介され、好評を博した。

図 51
印刷局製初日カバーの一例**
左上：皇太子殿下御成婚記念
昭和34(1959)年４月10日
左下：東京オリンピック
　　募金切手１次
昭和36(1961)年10月11日
右上：伊勢志摩国立公園
昭和39(1964)年３月15日
右下：切手趣味週間　花下遊楽図
昭和37(1962)年４月20日

**鍛治谷貫コレクション
(一般財団法人印刷朝陽会所蔵)

協力

一般財団法人印刷朝陽会(資料貸出)
郵政博物館(画像提供)

参考文献

○大蔵省印刷局編・発行『大蔵省印刷局百年史』
　第１～３巻、資料編　1971 ～ 1974
○大蔵省印刷局編・発行『大蔵省印刷局史』 1962
○内閣印刷局編・発行『内閣印刷局七十年史』 1943
○大蔵省印刷局編・発行『凹版美術印刷』 1987
○大蔵省印刷局編・発行『凹版美術印刷の技』 1988
○大蔵省印刷局編・発行『凹版による名画の再現』 1987
○大蔵省印刷局監修『郵便切手製造の話』
　(財)印刷局朝陽会　1969
○(財)印刷庁朝陽会編・発行『切手と印刷』 1949
○水原明窓『日本切手百科事典』 日本郵趣協会　1974
○日本銀行調査局編『図録　日本の貨幣』第8 ～ 11巻
　東洋経済新報社　1975
○松尾良彦監修『日本のお金』 大蔵省印刷局　1994
○植村峻『新訂版　日本紙幣肖像の凹版彫刻者たち』
　(財)印刷朝陽会　2010
○植村峻『日本切手の凹版彫刻者たち～切手とお札を彫った人々～』
　(公財)日本郵趣協会　2015
○植村峻『日本紙幣の肖像やデザインの謎』
　日本貨幣商協同組合　2019
○植村峻『紙幣肖像の近現代史』 吉川弘文館　2015
○小林英夫『日本軍政下のアジア』 岩波書店　1993
○寺田近雄『日本の軍票』 (有)アド・ユニ　1987
○日本銀行調査局編『日本金融史資料 昭和編 第33巻』 大蔵省印刷局　1972
○(社)日本印刷学会編『印刷事典　第5版』 (財)印刷朝陽会　2002
○東京印刷同業組合編・発行『日本印刷大観』 1938
○矢野道也遺稿『明治前　日本印刷技術史』
　明治前日本応用化学史 別刷　1963
○中根勝『日本印刷技術史』 八木書店　2002
○青木繁監修 『世界版画史』 (株)美術出版社　2001
○三島良績『切手集めの科学』 東京同文書院　1965
○三島良績『日本切手の製造』 切手趣味社　1964
○高久茂編『切手になった日本文化人』 一二三書房　1954
○日本郵券倶楽部「切手趣味」 第39巻　1954
○加藤倉吉談・牧野正久質問・記録「印刷彫刻と私(上)(下)」『切手研究』
　第345・346巻　1986
○鍛治谷貫「“印刷局凹版初日カバー”の誕生とその魅力」『郵趣』2019年９月号
○「郵趣タイムズ」第１号～第137号合本　1955.11.4 ～ 1958.12.5
○『さくら日本切手カタログ2008年版』(財)日本郵趣協会　2007年
○(公財)日本郵趣協会発行・監修『ビジュアル日本切手カタログVol.1
　記念切手編1894-2000』 2012
○(公財)日本郵趣協会発行・監修『ビジュアル日本切手カタログVol.2
　ふるさと・公園・沖縄切手編』 2013

令和２年度第２回特別展

加藤倉吉 最も多くの「顔」を彫り上げた男

2021.1.13(水)－3.28(日)

発　行　日　令和３年１月13日
編集・発行　独立行政法人国立印刷局 お札と切手の博物館
〒114-0002　東京都北区王子１丁目6-1
ＴＥＬ　03-5390-5194

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。